
第 1 回 T_EX ゼミ

小椋 信弥, 吉田 昌太, 福永 隆宏

2001 年 4 月 9 日 (月曜 4 限)

目次

第 1 章	T_EX の基礎	2
1.1	T _E X の誕生	2
1.2	L ^A T _E X とは何か	2
1.2.1	視覚デザイン	2
1.2.2	論理デザイン	2
1.3	T _E X を何故用いるのか	3
1.3.1	利点について	3
1.3.2	欠点について	3
第 2 章	L^AT_EX のインストール	4
2.1	インストールの前に	4
2.2	インストーラの起動	4
2.2.1	インストーラの起動の前に	4
2.2.2	インストール作業の開始	4
2.3	インストールの実行	5
2.3.1	インストールするコンポーネントの選択	5
2.3.2	フォントの解像度の選択	5
2.3.3	その他のソフトウェアのインストール	5
2.3.4	インストールの最終確認	6
2.4	インストールの作業の経過	6
2.4.1	ファイルをハードディスクにコピーする	6
2.4.2	秀丸エディタのインストール	7
第 3 章	P_TE_X の動作環境	9
3.1	P _T E _X による処理	9
3.2	DVIOUT による出力	9
3.3	P _T E _X 環境の完成	10
第 4 章	T_EXMAC の設定と利用	11
4.1	T _E XMAC の環境設定	11
4.1.1	秀丸エディタへの登録	11
4.2	T _E XMAC による原稿の執筆	11
4.2.1	必須となる設定事項の入力	12
4.3	原稿の執筆	12
4.4	T _E X による処理とプレビュー	14
4.4.1	フォーマットファイルの選択	14
4.4.2	T _E X による原稿ファイルの処理	14
4.5	よく使う機能, 便利な機能	15

第 5 章	TeX の練習	18
5.1	TeXMAC の利用	18
5.1.1	フォントの変更	18
5.1.2	箇条書きの利用	18
5.2	自己紹介の作成	18

第1章 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の基礎

1.1 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の誕生

$\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ とは、数学者でもありコンピュータ科学者でもある、アメリカ・スタンフォード大学の *Donald E. Knuth* 博士によって開発された組版¹用のソフトウェアです。

当時のコンピュータによる組版結果は、活版印刷によるものと比べて数式などの仕上がりが悪く、Knuth 博士はとも失望したそうです。そのため、Knuth 博士は約4年をかけ、特に組版が難しいと言われる技術関係の書物を美しく組版できるようなソフトウェアである $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ を開発したのです。

1.2 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ とは何か

$\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の組版機能は主に「プリミティブ」と呼ばれるもっとも原始的で組版指定の根本に関わる命令群によって実現されています。原始的であるため、普通に文章を作成するときこれらのプリミティブをいちいち操作するのではまったく非効率です。

そこで、効率よくそれらの機能を実現してくれるのが「マクロ」です。マクロとは、一定の組版処理を行うプリミティブや別のマクロを組み合わせて新たに作成した命令をいいます。 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ には、約300個のプリミティブと約600個の「plain $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 」マクロという、あわせて900個の命令が最初から備わっています。plain $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ とはKnuth博士が作成した、文書を記述するために必ず必要となるであろう最低限と思われるマクロ集です。

さて、そのような数あるマクロ集のなかで、世界的に最も広く用いられているのが、DEC社のLamport氏が作成した $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ です。現在日本で $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ によって組版が行われるとき、ほとんどの場合は $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ をベースにしています。

$\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ がこれほど広く利用されるようになった理由は、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ における最大の特徴であるその文書のデザイン方法に見出すことができます。文書のデザイン方法は、一般的に「視覚デザイン」と「論理デザイン」と呼ばれる2通りの方法があり、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ は「論理デザイン」のほうを採用しています。以下でこの2つの方法について、それぞれの特徴や長所と短所について述べることにします。

1.2.1 視覚デザイン

視覚デザインとは、最近“*What You See Is What You Get* (見たままに出力できる)”，略して“*WYSIWYG*”と呼ばれており、名前が示すとおりディスプレイ上で編集しているものとまったく同一の印刷出力が得られるデザイン手段です。希望どおりに文字を配置し、自分で整形して、自分が美しいとおもえる出力を手軽に取得できるのです。

しかし、文書の規模が一定以上（たとえば、画面を何度もスクロールさせなければならない規模）になると、図表や通し番号をつける場合には効率が悪くなることがあります。このことは皆さんも経験的にわかるとおもいます。

*WYSIWYG*のシステムは、画面上で見ているとおりの出力を得られる点では非常に便利な側面も持っていますが、反面、「*What You See Is All You've Got* (見たとおりの出力しかえられず、ミスの有無には関知しない)」というシステムだとして揶揄されることもあります。

1.2.2 論理デザイン

視覚デザインに対して、論理デザインは、文章の持つ論理構成にのみ着目して文章をデザインする方法で、一般に「マークアップ方式」などと呼ばれます。他にマークアップ方式を採用している言語としてHTML (Hyper Text Markup Language) が挙げられますが、このHTMLで記述されているWebページを思い浮かべてみてください。あるWebページを表示しているときにWebブラウザのウィンドウサイズを変更すると、Webページの外見はウィンドウのサイズにしたがって適切に変化しますが、中央揃えであるとか、段落であるとか、箇条書きであるとか、表であるとか、文章の論理構造にはまったく影響はありません。これは、文章の論理構成に応じて原稿中に埋め込まれたマクロ命令に従って、自動的に体裁を整えて文章を作成するのです。

¹正確には、「原稿の指定に従って、順序・字詰・行数・字間・行間・位置などを正しくくみ上げること。植字。」(広辞苑より)となっています。簡単に言えば、印刷物を作るために文字を配置することです。

これが、論理デザインの最大の特徴といえます。論理デザインでは、中央揃えであるとか、段落であるといった文章の論理的な構成をあらかじめ何らかの手段でマークアップしておくことで、体裁に依存しない文章を作成することができるのです。

L^AT_EX の場合、文章の論理的な構成は、あらかじめ L^AT_EX に用意されている「環境」と呼ばれるマクロ命令を通じて T_EX に伝えられます。たとえば、「同レベルの要素を列挙する」論理構成である「箇条書き」の場合、箇条書きの始まりと終わりにそれを宣言する命令を、箇条書きの各要素にもそれとわかる命令を、それぞれ指定することによって、T_EX に文章の構造を理解させることができます。

また、L^AT_EX には、環境のほかにも文章の構成要素（章や節）を指定する命令や、参照用の通し番号をつけたり、その通し番号を参照したりするための命令なども提供されています。

ユーザはこれらの命令を使用して、文章の論理構成や構成要素を T_EX に正しく命令を伝えるため、原稿中でただしく命令を使用する必要があります。また、ユーザは、文字の具体的な大きさ、配置などに気をを使う必要がなくなりますから、原稿内容に専念することができるため、L^AT_EX で文章を作成すると必然的に論理構成が整った、よく考えられた文章ができあがるとされています。そのように論理構成や構成要素をもとに組版を行いますから、文章の論理構成や構成要素を的確に表した美しい文書が自然に出来上がります。

1.3 T_EX を何故用いるのか

T_EX は個人で文書を利用する時は手間が少しかかってしまうが、当研究室などにおいて論文などをグループ利用する時には、Word に比べて格段に手間を省く事ができます。それでは、実際にどういった部分で優れているのかについてや、その逆の欠点についてを以下で説明することにします。

1.3.1 利点について

- 文章の体裁に依存しない文章作成が出来る
 - － 文章のデザイン法としてマークアップ方式をとっている為、文章の論理構成に応じて原稿中に埋め込まれた L^AT_EX のマクロ命令が自動的に文章のレイアウトを決定してくれる。
- フォーマットの統一
 - － 複数で文章を作成する時、各々で作成した文章を集めてくるだけで統一された文章をすぐに仕上げることができる。
- スタイルファイルの利用
 - － T_EX には文書構造とレイアウトの対応を定義するためのスタイルファイルというものがある。スタイルファイルを変更するだけで、文章のソースを変更することなく、文章のレイアウトを変更することができる。例えば、論文を提出する際にも、スタイルファイルを指定すると各学会の規格に合った論文を瞬時に作ることが出来る。
- 細かいレイアウトを考慮する必要がない
 - － 脚注を挿入したい場合や表や数式に参照用の通し番号を付けたい場合などでも、L^AT_EX が自動的に正確な処理を行ってくれる。

- 再利用性に優れる

1.3.2 欠点について

- レイアウトの自由度が小さい。
 - － レイアウトは T_EX が決定するため、文章のレイアウトに個性を発揮する事が出来ない。
- ファイルの扱いが困難。
 - － T_EX は画像と文書は別ファイルになっているためにファイル構成が困難である。また、画像を EPS ファイルに変換して貼り付けるという作業が必要になる。

第2章 L^AT_EXのインストール

2.1 インストールの前に

T_EXのシステムをハードディスクにインストールするためには、最低でも50Mバイト程度の空き容量が必要となります。また将来的にさまざまなフォントやマクロを追加したり、原稿ファイルを作成したりすることを考えると、最低でも100Mバイト程度の空き容量があるハードディスクを用意したほうがよいでしょう。

2.2 インストーラの起動

2.2.1 インストーラの起動の前に

まずインストーラを起動する前に、次の作業を実行してください。

- ・コンピュータを起動させた後、長時間にわたって作業していた場合には、インストールの際にシステムにかかる負担でWindowsが不安定になることがあります。いったんコンピュータを再起動してください。
- ・すべてのアプリケーションソフトを終了させてください。特に、ウィルスチェッカーなどの常駐アプリケーションソフトを利用している場合、常駐を解除からインストールしないと、インストール作業に失敗することがあります。
- ・EzT_EXがタスクトレイに常駐している場合には、終了させてください。
- ・もし“常駐秀丸”を利用して、秀丸エディタのアイコンがタスクトレイに表示されているなら、それを終了させてください。

以上の点を間違いなく実行したら、pT_EX2.1.8の実行環境を構築するために、さっそくインストーラを起動させましょう。まず、CD-ROMをCD-ROMドライブに挿入してください。次にマイコンピュータでCD-ROMを参照します。“Platex2e1999”と表示されているドライブをクリックして、CD-ROMの中身を見てみましょう。

T_EXのCD-ROMを立ち上げると図2.1の画面がでるので、setup.exeをクリックする。

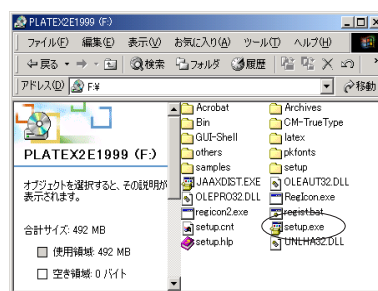


Fig. 2.1 Platex2e1999の中身

2.2.2 インストール作業の開始

インストーラの起動に成功すると図2.3のような画面が表示されます。インストーラがpT_EXの環境を発見できなかった場合には、図2.3のような画面が表示されます。この場合にはインストール開始ボタンを押すとインストール作業を開始できます。図2.2は、インストーラがシステムの中にインストール済みのpT_EXの環境を発見したときはアンインストールボタンが有効になるまでは、インストーラの起動後、若干の時間を要します。アンインストールボタンが有効になったら、このボタンを押す事で発見したpT_EX環境を削除することができます。

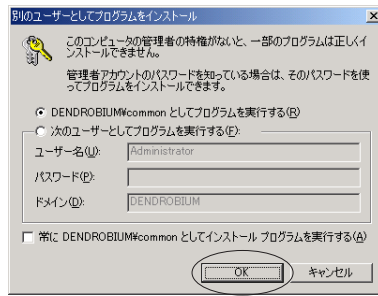


Fig. 2.2 p_TE_X の環境を発見した場合

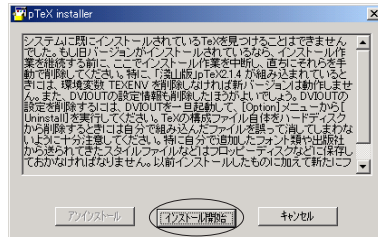


Fig. 2.3 p_TE_X の環境を発見できなかった場合

2.3 インストールの実行

現在図 2.4 のような画面が表示されているはずですが、これを読み終えたら次へボタンを押して、次の画面に進みます。以降のインストールの作業は、ウィザード形式で進行します。

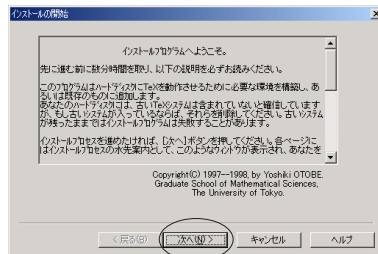


Fig. 2.4 インストール開始

2.3.1 インストールするコンポーネントの選択

まず最初に図 2.5 のような画面が表示されます。この画面では、インストールするコンポーネントを選択します。すでにチェックしてあるもの (p_TE_X2.1.8 基本セット, L^AT_EX2e パッケージ集, dvipsk) だけでいいので「次へ」ボタンを押します。

2.3.2 フォントの解像度の選択

図 2.6 では、インストールするフォントの解像度を選択します。ここでは利用するプリンタと同じ解像度にするので、300dpi と 600dpi を選択して「次へ」ボタンを押します。

2.3.3 その他のソフトウェアのインストール

図 2.7 に示すようにこのインストーラは、p_TE_X 本体のほかにも、秀丸エディタや T_EXMAC など、関連するソフトウェアをインストールすることができます。これによって、その他のソフトウェアをインストールしたり、T_EX の環境にあわせて設定したりします。ここでは“秀丸エディタ + T_EXmac”のみをチェックし、秀丸のインストール先を確認し、「次へ」を押します。すでに秀丸がインストールされている場合は、「参照」ボタンを押し、秀丸エディタの実行

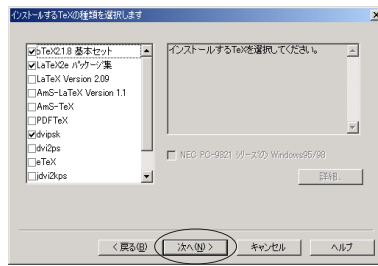


Fig. 2.5 インストールするコンポーネントの選択

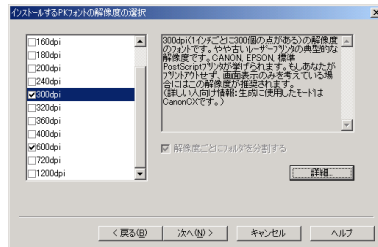


Fig. 2.6 インストールするフォントの解像度の選択

ファイル (Hidemaru.exe) の場所を指定します。

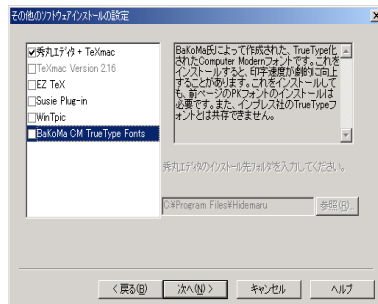


Fig. 2.7 その他のソフトウェアのインストール

2.3.4 インストールの最終確認

最後に、インストール先となるフォルダを設定します (図 2.8)。“起動ドライブ”が“c:¥”になっていると、“インストール先フォルダ”が“c:¥”になっていることを確認したら「完了」ボタンを押してください。インストール作業が始まります。

2.4 インストールの作業の経過

この節ではインストール作業の経過について説明しています。インストール作業の途中でいくつかの質問をされますので、この節の内容にしたがって設定してください。

2.4.1 ファイルをハードディスクにコピーする

ファイルのインストール作業は自動的に進みます。

ファイルのインストール作業はこのように順々に進行しますが、秀丸エディタをインストールするために途中で一時停止します。

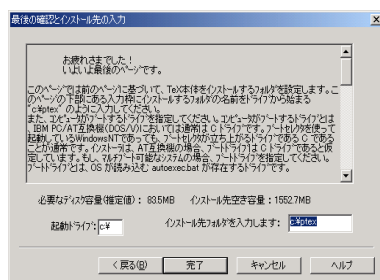


Fig. 2.8 インストールの最終確認

2.4.2 秀丸エディタのインストール

図 2.7 で“ 秀丸エディタ + TeXmac ”というコンポーネントを選択しているので、秀丸エディタのセットアッププログラムが起動します。初めて秀丸エディタをインストールする場合には、はじめの説明の画面で「次へ」ボタンを押してください。この時インストーラは、図 2.9 のようなダイアログボックスを表示しますが、このダイアログボックスは秀丸エディタのセットアップが終了するまで、絶対に操作しないでください。秀丸エディタのインストールが完了しない状態でこのダイアログボックスを操作しても、インストール作業を先に進めることはできません。



Fig. 2.9 秀丸エディタの入力待ちメッセージ

秀丸エディタのセットアップの最初の画面で「次へ」ボタンを押すと、秀丸のインストール先を示す画面が表示されるので、インストール先のフォルダは変更せずに「次へ」ボタンを押します。次の画面では「いいえ」を選択し、「次へ」ボタンを押します。

すると秀丸エディタの常駐確認の画面になっているはずですが、秀丸エディタは常駐させて利用することもできますが、ここでは常駐させないこととして話を進めますので¹、そのように設定してから「次へ」ボタンを押してください。ここでは、デフォルトのキー配置を選択しますが、後からキー配置を変更しなければなりませんので、ここではそのままの選択で、「次へ」ボタンを押してください。次の高速化の設定では、デフォルトのまま「次へ」を押します。

エクスプローラから TeX の原稿ファイルを開くと秀丸エディタが起動してそのファイルを表示してくれると便利です。このように、任意のファイルと秀丸エディタとを関連付けたいときには、「はい」を選択して「次へ」ボタンを押して、次に拡張子を登録します。画面には関連付けられている拡張子の一覧があります（図 2.10）

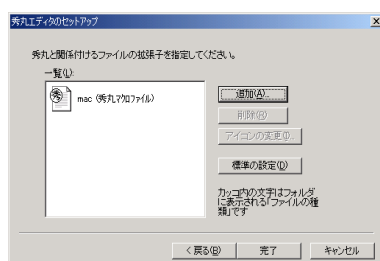


Fig. 2.10 関連付けの設定

ここで「追加」ボタンを押して図 2.11 の画面の記入欄に“ tex ”と入力してください。

「OK」ボタンを押すと先ほどの画面の一覧に、関連付けされた拡張子として“ tex ”が追加されます（図 2.12）

¹秀丸エディタは常駐させなくても十分早いですし、常駐しないほうがシステム全体も安定します。どうしても常駐させたい人は常駐させても構いません。

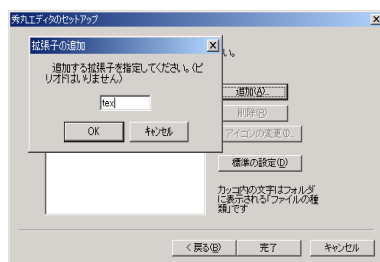


Fig. 2.11 拡張子の入力

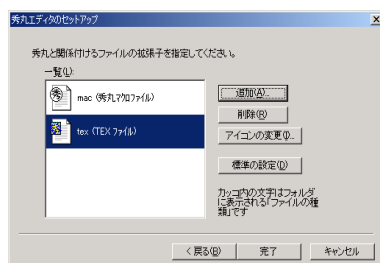


Fig. 2.12 拡張子追加の確認

ここで「次へ」ボタンを押してください。すると秀丸エディタの登録の画面が表示されます。ここでは出てきたとおりのチェックで構わないので、そのまま「次へ」ボタンを押してください。次に「完了」ボタンを押すと、秀丸エディタのセットアッププログラムは終了します。以上で秀丸エディタのインストールは完了です。秀丸エディタが起動しますので、ここでは何もしないでそのまま秀丸を終了させます。そして最後に図 2.9 の秀丸エディタのインストール終了を示すダイアログボックスの「はい」ボタンを押し、インストール作業を続けます。

第3章 $\text{P}\text{T}\text{E}\text{X}$ の動作環境

コンピュータが再起動すると、 TEX が利用できる状態になっています。ここでは、インストールを済ませた TEX の動作を確認します。また今後、 TEX をインストールしたフォルダを `c:\ptex` だと仮定します。

3.1 $\text{P}\text{T}\text{E}\text{X}$ による処理

インストールされた TEX 環境は、GUI シェルによって統合的に操作できるようになっています。GUI シェルとは、 TEX の実行ファイル群を内部で動作させ、画面上にその動作状況を表示する特殊な制御プログラムです。

この章では、GUI シェルを利用して、サンプルとして用意されている原稿ファイルを実際に処理し、その動作と利用方法を確認します。サンプルの原稿ファイルは `c:\ptex\sample` フォルダにインストールされています。

デスクトップ上に GUI シェルのアイコンが用意されているので、そのアイコンにドラッグ&ドロップする説明します。

まず、Windows の「マイコンピュータ」を開いて、C ドライブ、`ptex` フォルダ、`sample` フォルダと順にたどり、`c:\ptex\sample` フォルダを表示させます。

この中から `testlatex2e.tex` ファイルを探し、そのファイルを GUI シェルのウィンドウやアイコンにドラッグ&ドロップします。

GUI シェルにファイルが正しくドロップされると、次の様に TEX 処理が始まります。しばらく待っていると、処理が終了した事を示す次のようなメッセージが表示されますので、確認してください。この時点で、原稿がファイルの組版結果である DVI ファイル (`testlatex2e.dvi`) が生成されています。`testlatex2e.tex` ファイルはサンプルファイルなので、正常な動作環境が整っているならば、正常に処理が完了し、図 3.2 の画面が表示されるはずですが、正常に処理が完了して図 3.2 のメッセージが表示されたら「OK」ボタンを押してメッセージを消します。

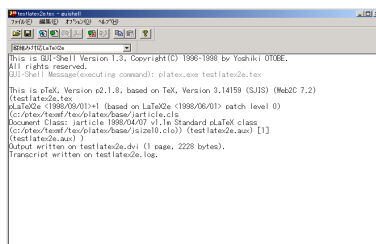


Fig. 3.1 GUI シェルで TEX の処理を行っているところ

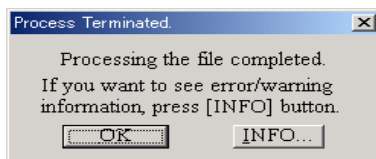


Fig. 3.2 処理終了のメッセージ

3.2 DVIOUT による出力

次にメニューから「ファイル」 - 「DVIOUT」を選択します。すると、こんどは DVIOUT が起動し、組版結果を表示しようとします。

しかし、 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ をインストールしたばかりの段階では、この DVI ファイルを表示するために必要な、ある解像度のフォント (cmmm12) が不足しています。DVIOUT には、任意の解像度のフォントが不足した時に、そのフォントを自動作成する機能が搭載されています。

不足しているフォントの作成が終了すると、図 3.3 のような DVIOUT で組版結果が表示されます。

組版結果を DVIOUT で問題無く表示できるようであれば、 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ 、GUI シェル、DVIOUT のインストールと設定は完了しています。

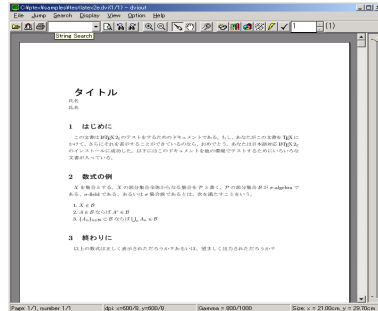


Fig. 3.3 DVIOUT による表示例

3.3 $\text{P}_\text{T}_\text{E}\text{X}$ 環境の完成

以上で、GUI シェルの動作は確認できました。基本的な利用方法についても、理解できたはずですが、これで、任意の原稿ファイル进行处理し、出力できる環境が入手できた事になります。しかし、いづらか処理環境と出力環境が構築できても、原稿が存在しなければ意味がありません。そこで、次に秀丸エディタによる統合環境を利用して、原稿を作成する方法について概説します。

第4章 T_EXMACの設定と利用

この節では、秀丸エディタと T_EXMAC を利用した総合環境の設定方法と利用について解説します。T_EXMAC とは、秀丸エディタ上で T_EX や L^AT_EX の命令をメニュー形式で入力したり、入力した命令を補完したり、作成した原稿を T_EX で処理して、DIVOUT で出力できるようにするものです。

4.1 T_EXMAC の環境設定

4.1.1 秀丸エディタへの登録

まず、秀丸エディタ（以下秀丸）を起動します。秀丸を起動したらメニュー画面から「その他」「キー割り当て」を選択します。図 4.1 のようなキー操作に対して機能を割り当てるためのダイアログボックスが表示されますので、図 4.2 に示すように「読み込み」を選んでください。キー割り当てを記憶したファイルがリスト形式で表示されます。T_EXMAC の登録は、T_EXMAC に対応したキー定義ファイルを読み込むことで実現されます。ここでは、図 4.3 に示されたリストの中から「def-tm98.key」を選択し「OK」を押してください。以下の説明も「def-tm98.key」ファイルを選択したものとして、話を進めます。

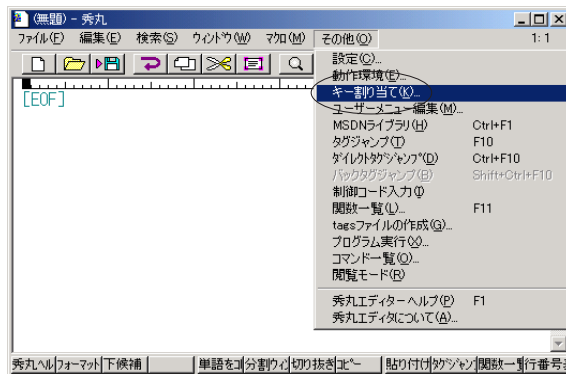


Fig. 4.1 秀丸エディタにキー割り当てを登録その 1

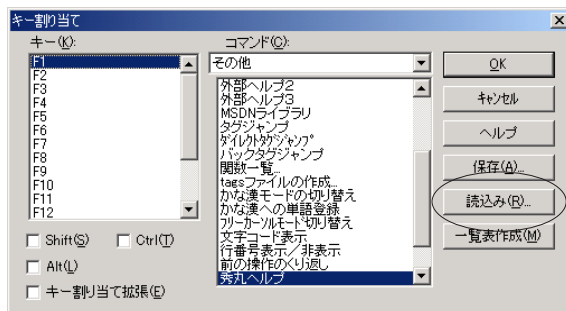


Fig. 4.2 秀丸エディタにキー割り当てを登録その 2

4.2 T_EXMAC による原稿の執筆

では、実際に T_EXMAC を使用して、原稿を作成し、T_EX で処理する方法について試してみよう。

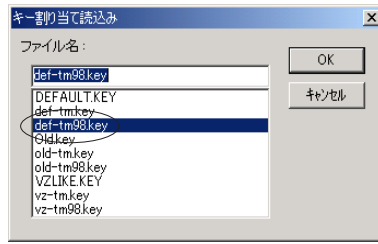


Fig. 4.3 秀丸エディタにキー割り当てを登録その3

4.2.1 必須となる設定事項の入力

秀丸エディタを起動したら、最初に「Ctrl」+「¥」キーを押します。すると、図 4.4 のような画面が表示されます。ここで、文書クラスやクラスオプション、パッケージなど、 \LaTeX で必須となる項目を設定することができます。表示されたメニューから「この設定で実行」を選んだら「Enter」キーを押します。すると図 4.5 のように表示されます。入力された文字列のうち、「¥」の記号で始まる文字列は \TeX や \LaTeX の命令で、「%」の記号以降はコメントです。図 4.5 で入力された命令群には \LaTeX の原稿を作成する上で、必ず記述しておかなければならない必須の命令が含まれています。

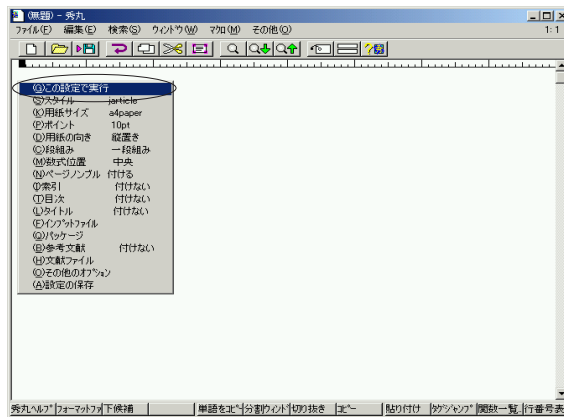


Fig. 4.4 sset2e.mac の起動

4.3 原稿の執筆

すでに、 \LaTeX で文章を作成する際に必須の命令群を入力しました。次は、いよいよ本文を記述します。秀丸エディタ上のカーソルは \LaTeX `begin{document}` と入力されている行の次の行に移動しているはずですが、もしこの位置になければ、矢印を用いて、その位置へ移動してください。

\LaTeX で文章を作成するためには、本文以外にいくつかの命令を記述しなければなりません。これらの命令は多数あり、一度に覚えることは困難になります。しかし \TeX MAC は、これらの面倒な命令語の入力を助けてくれます。

簡単な例文を \TeX MAC の機能を利用して作成してみましょう。

まず、「Ctrl」+「[」キーを押して `texmac98.mac` というマクロを起動します。図 4.6 のようなメニューが表示されますので、「見出し」に移動して「Enter」キーを押します。すると、章や節などの、文章の見出しを記述するための命令を選択するメニューが開きます(図 4.7)。この中から、「節の見出しに移動して Enter」キーを押します。

この操作によって、秀丸エディタにはセクション(節)を開始するための、 \LaTeX `section` 命令が入力されます。この時点でカーソルは \LaTeX `section` 命令の直後の「{」と「}」の間に表示されているはずですが。

\LaTeX では、命令にとって必須となる引数を「{」と「}」の間にはさみ、また、状況に応じて指定可能なオプション引数を「[」と「]」で挟んで、それぞれ指定する約束になっています。つまりこの場合、 \LaTeX `section` 命令の引数を「{」と「}」の間に入力すればよいことになります。 \LaTeX `section` 命令はセクションを開始するための命

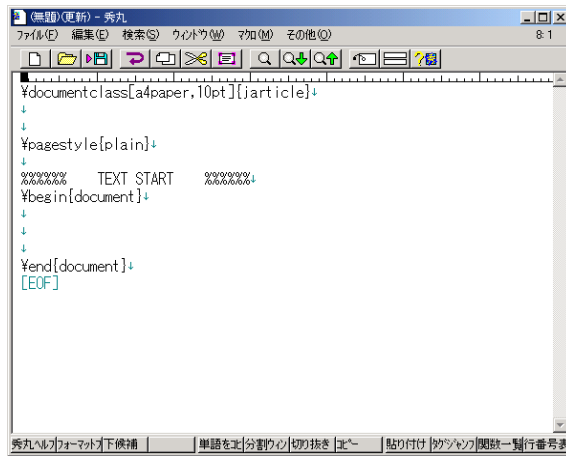


Fig. 4.5 sset2e.mac による自動入力

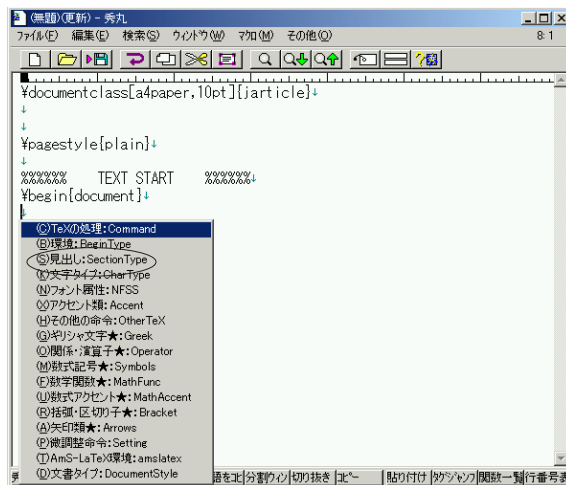


Fig. 4.6 texmac98.mac のメニュー

令ですから、ここでは「{ 」と「 }」の間にセクションの見出しを入れればよいということです。ここでは、仮に「はじめに」と入力してみましょう。また、改行して「 \LaTeX ゼミは必修ゼミです」と入力してください。(図 4.8)

以上で示したように、texmac98.mac を用いると、 \LaTeX の命令を大きな分類の中から選択し、秀丸エディタに入力することができるようになります。このマクロを用いると命令を忘れてしまった場合なども、メニューに表示される簡単な説明からその命令を探しエディタ上に入力できるので便利です。

しかしながら、いちいちメニューを順番にたどらなければならないのでは面倒ですし、文章の作成効率も低下してしまいます。そこで、 \TeX MAC には、図 4.9 に上げたような、rtex*.mac というマクロが用意されています。tex*.mac は「Ctrl」+「F」「D」「E」「K」、のいずれかを押すことで、起動できます。

ここで、これまでに記述した原稿を、保存することにします。保存するためには、秀丸エディタの「名前をつけて保存」を選択してください。すると、ダイアログボックスが表示されるので、適当なファイル名を入力します。このとき、ファイルの拡張子を「tex」にするようにしてください。ダイアログボックスの「保存」ボタンを押すと、ディスクに原稿ファイルが保存されます。

これでひとまず原稿ファイルが完成しました。

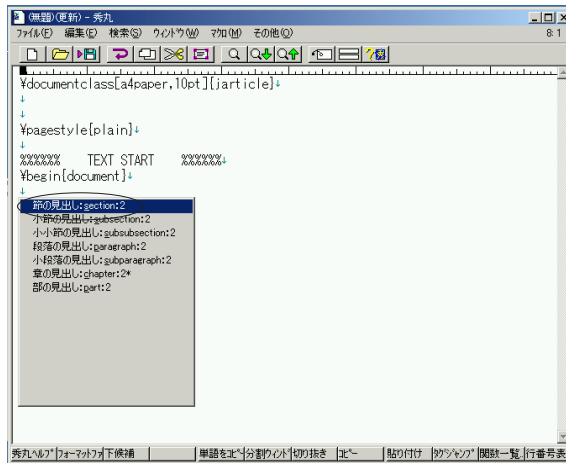


Fig. 4.7 見出しを選択すると表示されるメニュー

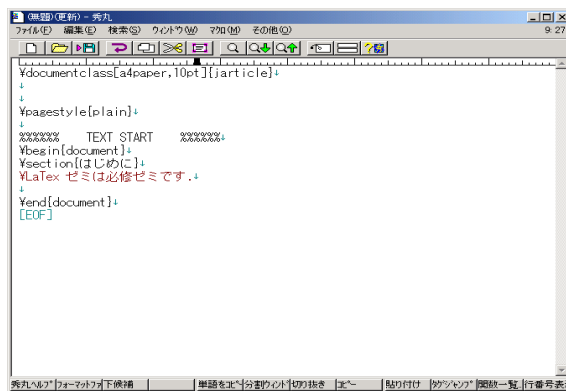



Fig. 4.8 例文を打ち込んでみる

4.4 TeXによる処理とプレビュー

4.4.1 フォーマットファイルの選択

原稿ファイルが作成できたら、それを TeX で処理します。このとき、原稿ファイルに応じてフォーマットファイルを選択しなければなりません。フォーマットファイルとは、TeX の設定ファイルのことです。TeX はフォーマットファイルを切り替えることでさまざまな特徴を持った組版システムへと変化します (L^ATeX とは、TeX の本体に L^ATeX のフォーマットファイルを組み合わせたものです)

4.4.2 TeXによる原稿ファイルの処理

作成した原稿ファイルを TeX で処理してみましょう。「Ctrl」+「」キーを押して、texmac98.mac を起動します。このマクロは、TeX や DIVOUT といった関連モジュールを秀丸上から操作するためのものです。

texmac98.mac を起動すると、図 4.10 のようなメニューが表示されるので、「現在のファイルのプレビュー」を選択してください。すると、図 4.11 のようなメッセージが表示されます。「はい」を選択すると、TeX で処理した原稿ファイルのプレビューがプレビューアと呼ばれるソフト（ここでは DIVOUT がこれにあたる）で表示されます。図 4.12 は先ほど作成した原稿のプレビューです。

原稿ファイルの保存をしないで上記の操作を行った場合でも、「名前を付けて保存」のダイアログボックスが表示されますので、このときにファイルを保存してもかまいません。また、このときに限り、先ほど述べたファイルの拡張子を tex にする作業をとばしても図 4.13 のようなメニューが表示され、「はい」を選択することで自動的に拡張子を tex にしてくれます。

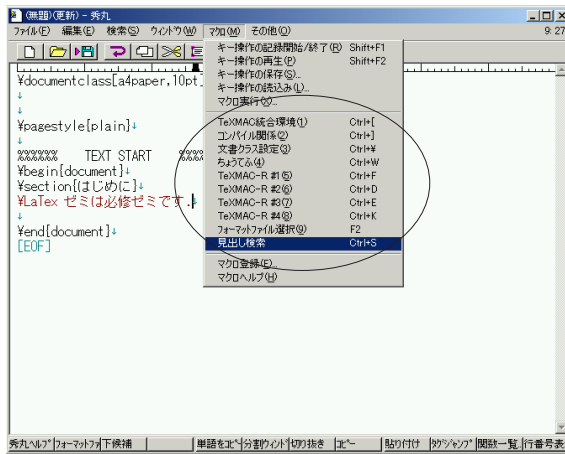


Fig. 4.9 デフォルトのキー割り当て

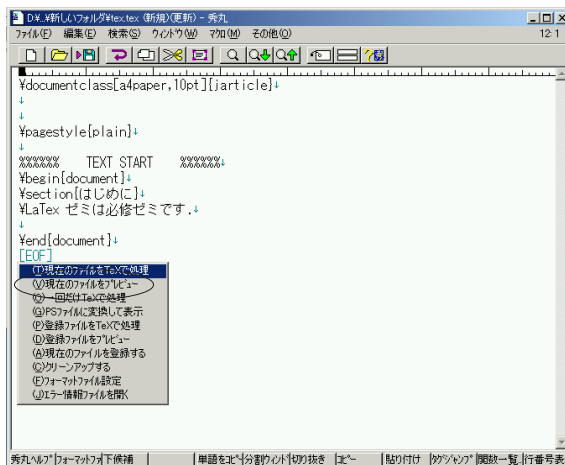


Fig. 4.10 texcom98,mac によるメニュー画面

4.5 よく使う機能, 便利な機能

$\text{T}_\text{E}\text{X}$ や $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_\text{E}\text{X}$ の原稿ファイルは, 本項で示したような作業を繰り返すことで作成できます. したがって, $\text{T}_\text{E}\text{XMAC}$ のような総合環境を利用することで, $\text{T}_\text{E}\text{X}$ の原稿の作成は非常に容易になります.

$\text{T}_\text{E}\text{XMAC}$ の各マクロを起動するキーの操作が覚えにくいというのであれば, 「Ctrl」 + 「[]」キーをまず覚えてください. このキー操作によって, 各種命令の入力補助とモジュール操作を可能にする texmac98.mac というマクロが起動します. また「Ctrl」 + 「[]」キーは作成したファイルをコンパイルするときにも使うので, 覚えておくと便利です. さらにもう1つ, Super $\text{T}_\text{E}\text{X}.\text{MAC}$ (ちようてふ) の使い方についても紹介しておきます. これは少しコマンドを覚えてきたときにとても便利な機能です. 具体例で示します. まず,

```
\sec
```

と入力してこのマクロを起動するとします. このマクロは「Ctrl」 + 「w」キーを押すと起動します. すると,

```
section
sec
```

という二つのメニューが開きますので, 実際に入力したいものを選んでください. これが, もし

```
\sect
```

まで入力した段階でマクロを起動したなら,

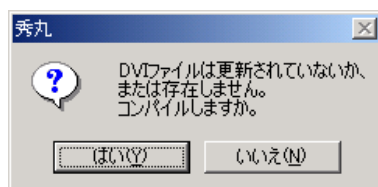


Fig. 4.11 作成したファイルのコンパイル

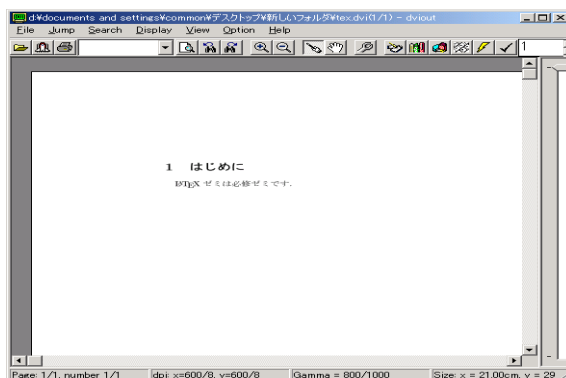


Fig. 4.12 例文のプレビュー

```
\section
```

といきなり確定されます。

```
\s
```

の段階でマクロを起動したとすると、s から始まる多くの命令のリストが表示されます (図 4.14)。その中から、望みのものを選択してください。

さらに、この場合 (1 文字だけ入力して起動) に限り辞書の学習機能を備えています。例えば、\s と入力してこのマクロを起動し、sharp を選択したとします。すると、次に同じように起動すると、sharp がメニューの先頭に位置しているはずで

す。また、beg と入力してマクロを起動したとします。すると、多くのメニューが表示されるとおもいます。これは、入力したい命令が begin であると判断したため、TEX.MAC の 'begin{}タイプ' のメニューが表示されているわけです。そこで、abstract を選択したとすれば

```
\begin{abstract}
```

```
\end{abstract}
```

と表示され、真ん中の空行にカーソルが移動します。

最後に、

```
\begin{flushr
```

の状態マクロを起動したとします。すると、いきなり

```
\begin{flushright}
```

```
\end{flushright}
```

と表示されます。

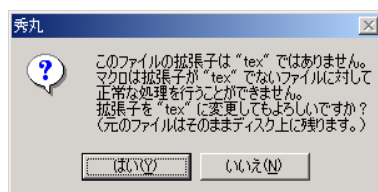


Fig. 4.13 拡張子を TeX にする

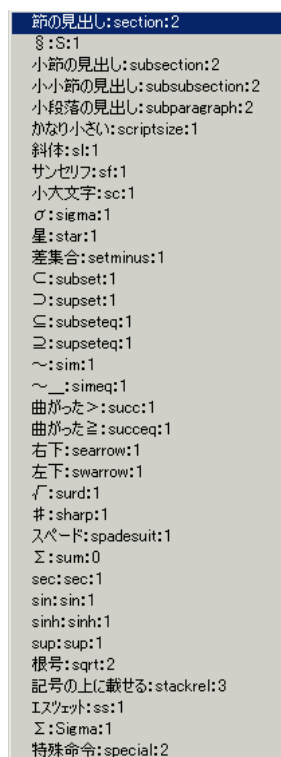


Fig. 4.14 s から始まる命令のリスト

最後にこのマクロを使用するにあたって注意事項を述べておきます。\\記号を忘れたまま、命令の一部を入力してこのマクロを起動すると、マクロは\\記号を求めて、ファイルの先頭方向へ走っていきます。そして、\\記号を発見したとしても、それは決して入力者の意図通りの結果にはなりません。ご注意ください。また、\\begin の{}内の補完に際しては、マクロとしては{}を探しているだけです。例えば、\\section{f1}と入力して間違っこのマクロを起動すると、おかしなことになってしまいますので、その場合はESCキーを押してください。また、\\beg{abstとかいて、\\begin命令自体もabstractも共に補完してもらおうというのは甘い考えです。

以上が TeXMAC を利用した原稿ファイル作成の概要です。

第5章 T_EXの練習

5.1 T_EXMACの利用

5.1.1 フォントの変更

T_EXMAC を使えば、**このようなことや**，このようなことが簡単に行うことができます。また，文字のフォントを *Italic* や，**Boldface** にすることもできます¹。

5.1.2 箇条書きの利用

- ・ このように，
- ・ 項目を箇条書きにすることもできます。
 - また，箇条書きは
 - 入れ子状態にすることもできます。
- ・ 番号付きの箇条書きをつくることもできます。

5.2 自己紹介の作成

次のページに載せたこの第5章ソースを参照にし，T_EXMAC を使いながら簡単な自己紹介を作成してみてください。

¹脚注を入れることも可能です。

```

\documentclass[a4paper,10pt]{jreport}
\title{第1回\TeX ゼミ課題}
\date{2001年4月9日}
\author{名前}

\pagestyle{plain}

%%%%%%%%%%      TEXT START      %%%%%%%%%%%
\begin{document}
\chapter{\TeX の練習}

\section{\TeX MAC の利用}
\subsection{フォントの変更}
\TeX MAC を使えば, {\Large このようなことや, }{\tiny このようなこと}が簡単に行うことができます. また, 文字のフォントを\textit{Italic}や, \textbf{Boldface}にすることもできます\footnote{脚注を入れることも可能です}.

\subsection{箇条書きの利用}
\begin{itemize}
\item このように,
\item 項目を箇条書きにすることもできます.
\end{itemize}
\item また, 箇条書きは
\item 入れ子状態にすることもできます.
\end{itemize}
\item 番号付きの箇条書きをつくることもできます.
\end{itemize}

\section{自己紹介の作成}
次のページに載せたソースを参照にし, \TeX MAC を使いながら簡単な自己紹介を作成してみてください.

\end{document}

```